

老舎小説の食譜—長編小説『駱駝祥子』篇

齋藤 匡史

はじめに

老舎文学の特徴の一つに「伝統的物語文学」との類似性がしばしば取り上げられる。この点について筆者は『老舎試論』¹⁾で、「語り手としての『作者』や時々顔を出す作家自身が語る物語は、長編にしる短編にしる現実サイズ、等身大で、読者を話題の身近さ、真実性で引きつけようとする要素を持つ。人物はこれなる風態で、かくの如き立居振舞と示し、読者はその人物評価の判断材料として受けとめる約束ごとが守られている。情景描写、場面設定、人物の持ち物まで、きちんと約束ごとに従っている」と述べた。

「衣冠による人物描写」とは、例えば老舎の文学世界では次のように描写されている。

張兄貴は顔が長かったが、決して馬面をぶらさげてはいなかった。いつも笑顔で顔のよこはばをひろくし、しかも、四十、五十の年配によくある贅肉をでっぷりつけていた。高い鼻、陰陽眼、大きな耳たぶ、どこをとってもりっぱな金持ちである。服装も大したもの、紺サージの長衣には、模様のはいったラクダの毛の裏がつき、黒無地の緞子のチョッキをおっている。チョッキの胸ポケットには、金のキャップの万年筆をさしている。いまだかつてインキをつけたことのない代物で、ときどき取り出して絹の白いハンカチでペン先をふくだけである。手には濰県（山東省にある）の漆ぬりに金の輪をはめたステッキをさげているが、いまだかつて先を地面につけたことがない。イギリス製のシルバー・ス

1) 齋藤匡史『老舎試論』 北九州大学大学院紀要第2号 1989年3月

ターのマドロス・パイプをもち、七宝焼のマッチ・ケースでたばこの葉を軽くおさえては吸っている。左手のくすり指に、金の指輪をはめているが、それには篆書で名前がほってある。長衣の下には中国式の小褂（じゅばん）を使わず、西洋式のワイシャツを着ている、両方のそで口についている宝石まがいのカフス・ボタンがすっかり気に入ったからだ。

（傍点、「模様のはいったラクダの毛の裏」は、ラクダの綿毛を中綿にした生地にも模様のある中裏のこと。「小褂（じゅばん）」は、肌着ではなく、中国結びのボタンの伝統的シャツ—筆者註）²⁾

見栄張りで体裁を大いに気にする中年の俗物小役人、「張兄貴」を身なりの描写で巧みに読者に提示している。さらにユーモアに諧謔を込めた表現は、老舎の得意とするところである。恐らく近代小説に於いては、心理、表情、動作、行為の描写や思考、会話、抽象的、具体的事物との関わりと反応或いは生活、嗜好等などをないまぜて、より真実性を具した人物形象を試みるはずであるが、老舎の文学世界では、上述のような衣冠による人物形象を好んで用い、直截的、視覚的に人物を表現しようとする。これはほかでもなく「話本」から講談、章回小説とつづく中国の伝統物語形式に借りた手法である。

次に『水滸伝』の例をあげる。

その言葉のおわらぬうちに、ひとりの巨漢がずかずかと茶店のなかへはいつてきた。史進がその男を見れば、武官らしいようすである。そのいでたちといえば、

頭は^{しまら}芝麻羅（胡麻色の薄絹）の万字頂頭巾（頂上^{まんじ}が^出になった頭巾）
に^{つつみ}裏み、^{うしろ}脳後には^{ちゅうし}兩個の太原府の紐糸の金環（結びどめの金の環）、上に

2) 伊藤敬一訳『離婚』老舎「中国の革命と文学4 老舎、曹禺集」平凡社 1972年5月、7頁

は一個の鸚哥緑（濃い緑）の紵糸の戦袍（麻の軍衣）を穿ち、腰には一條の文武双股の鴉青の縲を繫け、足には一双の鷹爪皮の四縫の乾黄靴（四すじの縫目の黄色の長靴）を穿ち、生得（生まれつき）面は円く耳は大きく、鼻は直く口は方（四角）、腮辺（あご）には一部の貉獠の鬍鬚（むじなひげ）、身の長は八尺、腰の闊は十围。³⁾

老舎の人物描写の祖型が、このような章回小説にある事が歴然としている。これが老舎の文学を「伝統的物語世界」と評する所以である。

今一つの老舎文学の特徴ともいうべきものは「飲食、食品」である。「飲食、食品」は、物語展開上必要な場面・背景を飾る道具（本稿では「景物」の語を使う）、また比喩、話題として取り上げられる場合もあるが、芸術加工や表現上欠くことのできない食品、換言すればそれ自身、登場の必然性を持つ「飲食、食品」も作品に見られる。これらの存在が老舎文学の世界を豊かなものに形作る特徴となっている。この点については拙稿「『駱駝祥子』その「食」の表現⁴⁾」で論考した。本稿は長編小説『駱駝祥子』に現れる「食品」を収録し、物語り展開、文脈におけるそれらの意味を分析、考察するものである。

『駱駝祥子』食譜

- ・『駱駝祥子』は1936年に青島で執筆、同年『宇宙風』誌に発表、人間書屋1939年3月初版、1955年1月人民文学出版社修訂本第1版。本稿の使用版本は1980年11月人民文学出版社版『老舎文集 三』（原版は1939年3月上海人間書屋版）である。
- ・日本語訳は1991年3月 白帝社版『老舎 駱駝祥子』中山時子監修、中山高

3) 平凡社『中国古典文学体系28 水滸伝 上』施耐庵作 駒田信二訳 第三回 39頁

4) 齋藤匡史「『駱駝祥子』その「食」の表現」, 中国言語文化研究論集『北方人』 第5号1997年46-55頁

志訳を引用した。引用時に必要に応じて（ ）で筆者註を加えた。数字は所在頁。訳文に若干誤植があるがそのままとした。

- ・原文の食品が訳文で意識されている場合などには、原文を付した。
- ・食品名は原文を【 】で示し、漢数字で「段」を、算用数字で「頁」を示した。また訳文で食品が註扱いとなっているものは、註を参照して説明を付した。
- ・食品名は登場順に収録したが、同一項目は登場順にまとめて記した。
- ・註解は◆で示した。文中の日本語訳は、前項の中山高志訳を引用したが、必要に応じて下記の参考文献からも引用した。食品の解釈はこれらの中に相違がある場合は、他の文献を参照し、筆者が勘案して記した。
- ・飲食、飲酒の叙述のうち純然たる行為・動作については割愛した。

参考文献：

『老舍 駱駝祥子 注釈』牛島徳次著 1995年10月 同学社

『老舍事典』中山時子編 1988年12月 大修館書店

『老舍・巴金 駱駝祥子』現代中国文学4 市川宏・杉本達夫訳 1970年11月
河出書房新社 引用註略号〈現〉

1 【窩窩頭】 — 4

- ・(40前後の老車夫) こういう人々は生命の最も盛んな時代は過ぎ去っており、今は「窩窩頭」^{ウオウオトウ}を食べては血と汗とを街に流し、……15

◆中国北方の主食。粗食の代名詞。「窩頭」^{ウオトウ}ともよばれ、とうもろこし粉や稗粉、大豆粉を混ぜてつくった蒸かし饅頭で形状は釣り鐘に似ている。大変咀嚼しにくく咽を通りにくく、味もよくない。粗食に甘んじて肉体労働に従事しなければならない車夫—下層市民の生活を一つの食品で象徴的に表現している。

2 【热烧饼夹爆羊肉】 — 11

・最もよいのはまず紳士を前門まで引き、次に東安市場へ行き、市場へ行ったら最上の屋台店で飯を食うべきだと。例えば熱い“焼餅”に“爆羊肉”（羊肉の強火いため）を挟んで食うようなたぐいのものを。26

◆苦勞して手に入れた自分の人力車、記念すべき初仕事の後の祝いの食事、普段の粗食ではなく、細糧(上等の主食)である、出来立ての熱い「焼餅」(小麦粉に塩、練り胡麻油を加え、小型の円盤状に成形し、片面に白胡麻をまぶして、炉の内壁に貼りつけて焼いたもの)に普段めったに口にしない羊肉の炒め物を挟むという、庶民のささやかな贅沢を「窩頭」と対比して表現した。

3 【烙餅】 二14

・彼の注意は車のことばかり。車は“烙餅”^{ラオピン}そのほか一切の食物を産み出すそれこそ万能の田地で……30

◆葱を烙餅(小麦粉に油と塩をいれ練り、薄めに延ばして両面焼いたもの)に巻いて食べるもので、当時肉体労働に従事する者にとっては上等な外食品。家庭でも主食として作られたことから、「家常餅」ともよばれる。ここでは安定した車夫達の生活の象徴としている。

4 【茶】 二15

・彼は茶を一杯飲んでから南の方に行って客を待とうとした。32

◆行為。北方は乾燥した気候であり、水分補給はきわめて重要である。車夫のように四六時中汗を流す職業にあっては、なおのこと。白湯と違い、茶には解毒、解熱・利尿、精神安定等の作用があり、渴きと疲れを癒す。物語では「茶」は重要な道具立てになっており、比較的上等な茶葉で入れた茶を飲む時、屑茶しか飲めない時など明快な叙述である。また茶館は車夫達の休息、社交の場として頻繁に描かれる。

5 【干糧】 三23

- ・彼はどうしても安全に北京の街に入らなければ困るのである。身にはお金を一銭も持っておらず、食料も持っていないので、どうしてもあまり暇どってはいられなかった。43
- ・他必须稳稳当当的快到城里，因为他身上没有一个钱，没有一点干粮，不能再多耗时间。

◆古来より炒った米や麦こがしが携帯用糧秣であった。

6 【棒子面餅子】 三31

- ・祥子は一気に冷水を飲み干し、ピカピカ光る三十五円の銀貨と“棒子麵 餅子”^{パン ズミエンピンズ}二個を手に、胸元でやっと合わさるぐらいのぼろぼろの白の上着を着て北京へ向かって足を運んだ。55

◆粗末な主食。「棒子麵」は、とうもろこし粉のこと。「餅子」は粉を練って焼いたものを言う。徴用されてしまった人力車のかわりに兵營から駱駝三頭を引いて、北京へ逃げ帰る途中、祥子は農民に「冬毛がそろえば、三頭で六十円」するものを仕方なく三十五円で売り払った。その農民からもらった食べ物も粗末なものであり、祥子の失望感を増大させている。

7 【馄饨】 四32

- ・彼はおもむろに立ち上がり、屋台の馄饨屋の所まで来て、一碗の馄饨を注文した。彼はやはり地面に座り込んだ。汁を飲み込もうとした時に嘔気がや^{むかつき}ってきたので、長い間口に含んでいてやっとのことで飲み込んだ。そして、もう食べるのはよそうと思ったが、しばらくして熱い汁が一条の線のようにまっすぐに腹部まで到達したとき、続けざまにげっぷが二つ出てきた。56

◆象徴的な食品登場の例。老舎は祥子を突発的な事件、非日常から、北京でのこれまでの日常の尋常な生活に復帰させる過程を、空腹から徐々にまともな物を口にさせてゆくという展開をとる。ごくあたりまえのことが、物語において自然さ、現実味を深めている。北京のはずれ海淀の木賃宿で三日間寝込んだあと、祥子は汁物のワンタンを口にする。北京のワ

ンタンは、ごくごく薄味の汁に小ぶりのワンタンを入れ、香菜、胡椒などをかけて食す庶民の軽食である。そしてそれは一刻も早く戻りたい北京の味である。北京は彼に一切の夢と生活を与えてくれる街である。この後、祥子は着ていたぼろを売り払い、身なりをこざっぱりと整え、城内をめざす。

8 【葷湯腊水】 四34

9 【棒子面】 四34

・ここでは乞食でさえも肉入りのスープのおいしい食べ物にありつくことができるのである。……田舎には棒子麵のほかには何もないではないか。59

◆「葷」も「腊」も「肉」を意味する語。「棒子麵」はとうもろこし粉で粗食の代名詞扱い。

10 【老豆腐】 四34, 11 【同】 四38, 12 【同】 四38

・長い間休んだあとで、彼は橋のたもとで一碗の^{ラオドゥフ}老豆腐を食べた。酢、醤油、^{さんしょうあぶら}花椒油、^{にら}韭菜のみじん切り、これらがあつあつの真っ白な豆腐の熱で実によい香りを立て、この香りで祥子はしばらくの間は息も詰まらんばかりだった。両手で碗を抱え、濃い緑の韭菜のみじん切りを見ているうちに、彼の手はがたがた震えて止まらないくらいだった。一口食べると豆腐の熱さは腹までしみわたった。彼は小匙で^{とうがらしあぶら}辣椒油を二杯かけた。一碗食べ終わった時分には大汗をかいて、ズボンの腰の所がびっしょりだった。彼は眼を半ば閉じ、碗を突き出して、「もう一杯」と叫んだ。60

◆「老豆腐」はにがりを入れないで作った柔らかい豆腐に、香菜、蝦皮（小さな桜海老の干物）、漬物の微塵切り、刻みねぎ、酢、醤油、辣油などの薬味をのせて食す軽食。この軽食を食す件を詳細に描写するのは、それは北京に再び生還したという心からの生への喜びを食欲と共に堪能させた表現といえる。「生還の喜びと恐怖感からの解放で、『彼の手はがたがた震えて止まらないくらいだった』が、一碗食べ終わると、人心地がつき

自分の置かれている現実に戻される。『彼は目を半ば閉じ、碗を突き出して「もう一杯』と言った。この「もう一杯」という言葉には、さらに充足感を得ようとする欲求と共に、これからの再出発への覚悟が込められ⁵⁾た叙述である。

- ・「老豆腐二杯食ったばかりだよ」と遠慮の一端を示した。66
- ・「まあこっちへ来てお食べよ、毒は入っちゃいねえよ。老豆腐二杯が何の足しになる」ひのえ午嬢は兄嫁が小さな弟をひどくかわいがっているような格好で彼を引っ張ってきた。66

◆行為，直喩。

13 【茶葉】 五42

14 【白糖】 五42

15 【茶】 五42

16 【碎末】 五42

- ・たった一袋の茶でさえ、上等なものは飲む気になれなかった。茶店では、彼ぐらいのれっきとした車夫は、一走りのあとでは一包み十銭もする上等の茶に気を補い、のぼせを降ろすため砂糖の二包みも入れてはりこんで飲むものであった。……実際このような二杯のお茶で気を静める必要があるのだ。ただ、彼は例のことを考えて、やはり一包み一銭の屑茶で我慢するのだった。

72

◆車夫の中でも、「年若く筋力逞しく足に自信のある者どもは、……一気の一円、二円と稼ぐ」ので、上等な茶に疲れを癒す砂糖を入れて飲む。かつての祥子もそうだった。三、四年間、働きに働き、切りつめに切りつめてやっと買った自分の人力車、これは「たたかいと苦しみの結晶であり、報酬であった」が、天から降った災難で失ってしまった。再び少しの贅沢も

5) 註4に同じ。

許されないという、戒めに最低の茶葉で我慢する。単純な叙述による明快な表現である。

17【萝卜】 五45

- ・彼は齒車のような男だったのだ。
- ・他是愿意一个萝卜一个坑的人。

◆直喩，慣用表現。「一つの穴には，一本の大根」。物事はそれぞれきちんと決まっているという喩え。

18【烧餅】 五45

- ・運悪く，最も忙しい日にめぐりあわせたくらいに思って，別に何も言わず自分の臍繰りで“烧餅”を買った。78

◆行為。

19【白梨】 六51

20【醬鸡】 六51

21【熏肝，醬肚】 六51

- ・机の上には青みがかった未熟の梨が数個，徳利が一本，白磁の杯が三つ，特大の皿の中に“醬鷄（鷄の醬油煮込み）”半羽分と“燻肝醬肚（レバのいぶしと胃袋の醬油煮込み）”が盛ってあった。88

◆外食生活の祥子の最大の奮発はせいぜい屋台の「熱焼餅夾爆羊肉」である。こうした食生活の祥子にとって「ひのえ午嬢」が用意した上述の酒肴は，普段口にしない「おいしい物」であったはずだ。なぜならこれら食品はひのえ午嬢が祥子を籠絡するための「餌」であり，「ひのえ午」にとって祥子は「青みがかった未熟の梨」でもあった。これら食品は「熟食」と呼ばれる加工食で，専門店から購入して来るものである。「杯が三つ」は，第三者，特に父親の劉四爺が部屋に入ってきた場合の安全策で，「祥子を籠絡し，父親から“人和車廠”を合法的に奪い取る計画の始まり」⁶⁾で

ある。この場面は物語全体の流れの転換点となる重要場面であり、これら食品の必然的な登場場面である。

22【熏酱肉】六51

- ・“白乾酒”の鼻をつく香りと、煮込みといぶし肉のにおいが混じり合っ
つこい重いにおいを発散していた。88

◆道具，象徴。

23【鸡蛋】六57

- ・子供が生まれると紅塗りの玉子を送るものだが、今の祥子の顔色がちょうど
それだった。97

◆直喩。

24【窩窝头】六57，100【同】十六146

- ・「真からの“窩^{ウオウ}頭”あたまだね。お掛けよ。咬つきはしないよ」98

◆「根っからの貧乏性だよ、お前は……」〈現〉、人和車廠を父親から代
替わりさせようという「ひのえ午嬢」の算段に乗ろうとしない祥子を田舎
の主食である「窩窩頭」に喩えて言い、揶揄している。

- ・「……毎日毎日“窩窩頭”ばかりかじって、仕事と女房に責められりゃ、どん
な丈夫な男だってくたばってしまうに決まってる」241

◆粗食の代表として言う。

25【炸酱】七59

- ・今後彼ら親子と絶交すれば、ひのえ午嬢が怒ってじいさんに告げ口でもして、
あの金をねこばばされてしまう懸念が十分にある。100

- ・从此不再去见他们父女，也许虎姑娘一怒，对老头子说几句坏话，而把那点钱“炸了醬”。

◆諷諭，北京方言。「味噌を油炒めする」つまりジャーッという大きな音が出ることから，大騒ぎにかこつけて，金品を奪取するの意。

26 【炒肉】 七59

- ・それも彼女をもらうためでなければ，あの何台かの車をもらうためじゃないか。それこそ姦婦の夫だ。こんな恥が忍べようか。101

- ・不为要她，还不为要那几辆车么？“当王八的吃俩炒肉”！

◆俗語，女房を人に寝取られても平気な人間は，二人分の炒め肉を食べるという意味から，恥知らずの欲張りを言う。

27 【糖炒栗子】 八72

28 【落花生】 八72

- ・もう初冬的时候になってきた。夕方になると小路の奥では甘栗や落花生売りの呼び声が，澄んだ空気を通してはっきり伝わってきたが，……121

◆景物。

29 【肉包子】 九77

- ・「いい気なもんだね。肉包子（肉まん）を犬にぶつけたように，まるで帰ってこないじゃないかね」129

◆換諭，慣用表現。「歇後語（しゃれ言葉）」で「肉包子打狗—有去无回」を作る。犬を追い払うのに，食べ物をぶつけても犬は喜んで食べてしまうだけ—行つたきり帰ってこないの意。

30 【落花生】 九84

31 【花生】 九84

- ・祥子はまっすぐに南側の小店に走った。店は寒さを防ぐため，もう戸を閉め

ていたが小窓を開けてここで商売を続けていた。祥子はこの小窓から四両の白乾と三銭の落花生を買った。141

- ・酒は机の上でふんぷんとくさい臭いを発していたが、臭いをかぐのもいやだった。落花生すら手を伸ばして取るのがおっくうだった。142

◆道具，象徴。

32 【茶】 十87

- ・ここで休んでいるのはほとんどがお抱えの車夫ばかりで，……147
- ・喝茶的几乎都是拉包月车的，…

◆行為。

33 【大餅】 十87， 34 【同】 十87

35 【水米】 十87

36 【餅】 十88

- ・ある者は一卷の“^{ダアピン}大餅”を片手で握り，一口で半分くらいも頬張り，首を太くし真っ赤になって飲み込んでいた。147
- ・大餅を頬張っていた先生さえ口の中にやっと舌が動けるだけのすきまを作り出し，一方では慌ててのみ込みながら一方では話したので，頭の上の筋まで飛び出てきたのだった。147
- ・くそったれめ。このおれだって……げぷっ……二時から今まで飯も水もまるで口に入れる暇なしだ。147
- ・くるりとみんなを一回り見回して頭を振りながら，また一咬み“大餅”をのみ込んだ。148
- ・转圈看了大家一眼，点了点头，又咬了一截饼。

◆象徴，行為。「大餅」，「餅」，「餅子」は小麦粉を熱湯で捏ね，麵棒で丸く延ばし，焼いたもの。

37 【果子】 十88

38 【茶】 十89

39 【白糖水】 十89

40 【糖水】 十89, 41 【同】 十90

- ・顔は幾日も洗ったことさえないらしく、血色などまるで分からなかったが、耳だけは熟しきって枝から落ちた果実のように凍えて、透き通るほど真っ赤になっていた。149
- ・茶がまだ届けられないうちに、この老車夫の頭は少しづつつつむいて、そのうち全身が腰掛けからずり落ちてしまった。149
- ・「動かすな！」茶館のおやじは覚えがあるのでみんなを制しておいて、自分だけ寄って行って老車夫の襟を広げ、抱き起こして椅子を背中に支い、手で両肩を引き起こし、「砂糖水！早く！」と叫んだ。150
- ・砂糖水を口のところに押しつけられたとき、やっと老人は「うーん」と声を出した。
- ・「やれやれ！」老人はあたりを見回し、両手で茶碗を持ち、一口一口砂糖水をすすった。そして、ゆっくりと飲み終わってからまたみんなを一通り眺めた。

◆道具。

42 【羊肉馅的包子】 十90

43 【包子】 十91, 44 【同】 十91, 45 【同】 十91, 46 【同】 十91, 48 【同】 十92, 49 【同】 十92

- ・老人が腹がぺこぺこだということを聞いたとき、猛然と飛び出して行って、飛ぶようにまた帰ってきた。その手の中には白菜の葉で包んだ羊肉入りの肉まんじゅうを十個持っていた。152
- ・老人は手で肉まんじゅうを撫で回していたが、取り上げようとはしなかった。153
- ・（小馬兒は）老人のそばに立って右手でまんじゅうを受け取り、左手では自分でもう一つ取り上げて、がつつと食べだした。153

- ・「これゆっくりお食べ」老人は一方の手で孫の頭を撫で、一方の手でまんじゅうを取って、ゆっくりと口に運んだ。153
- ・小馬兎はまんじゅうに向ってうなずき鼻をすすって、「お爺さん三つ食べなさいよ。後はみんな、わしがもらうよ。後でお爺さんを乗せて帰ったげるからね」……
老人は自分のを食べ終わり、杯の中の酒を飲み干して、小馬兎が食べてしま
うのを待って、……154
- ・小馬兎は食べ残りのまんじゅう一個をまるのまま無理に口に押し込んだ。154
- ・彼は今までこんなにやすやすと金を使ったことはなかったのだが、今ではこの老人と子供のためにまんじゅうを十個買ってやったことがこの上もなく嬉しくなった。155

◆老車夫が茶館で昏倒したあと、それが空腹のためであることを知った祥子が「羊肉餡の饅頭」を十個買って来て、老車夫とその孫に与えるくだり。全124行に涉り、第十段、茶館の場のほとんどを占めている。「(老車夫と孫がぼろ車を引きながら寒空の中を家路につく姿を見送りながら)祥子はこの状態を見聞きしながら心の中には今まで感じたことのない辛さを覚えた。小馬兎を見ると、まるで自分の過去そのものの様に思われ、老人を思うと自分の将来を見せ付けられたような気分になったのだった」、これがこの段の主題とも言える。「今までこんなにやすやすと金を使ったことはなかった」祥子が与えた「まんじゅう」は、善意の象徴として、この小さな茶館で休息をとる車夫達を代表したものである。そして、これは祥子や車夫達が普段口にする物ではないごちそうである。しかしこの「まんじゅう」はその場しのぎ、いわば一時の安逸であり、老車夫も祥子達もそれは重々承知している。祥子達もいつかはこの老車夫のような境涯に落ちるであろうというやるせない空気と施しに対する充足感が混在する場、その中心にごちそうの「肉入りまんじゅう」がある。

- ・「よしなよ、その話！」小馬児の頬は桃のように膨らんで、食べながらも懸命に爺さんを引き止めた。154

◆直喩。

50 【糖瓜】 十一94

- ・街はだんだん活気を帯びてきた。竈の祭りに供える飴が至る所で見かけられ、どこを歩いてもこの飴を売る声でいっぱいだった。158

◆景物。旧暦12月23日に行われる竈の神様への感謝の供え物。麦芽糖でつくった瓜の形をした飴を飾る。

51 【鸡】 十二109

- ・料理人に首っ玉をつかまれた鶏は、ちょっと手を緩めてもらって一口息を吸い込ませてもらえればそれでいいだけで、大それた希望など何もなかったのだ。182

◆諷喩， 象徴。

52 【鸡】 十三113

- ・もうすぐ年の暮れなので、あちらでもこちらでも鶏を買ってきて飼っているとみえ、鶏の鬩の声も以前より幾倍か増しているようだった。至る所から鶏鳴曉を告げ、実に豊年瑞雪といった感じだった。……眠ろうとすればするほど寒さが身にしみ、あちらこちらから鶏の鳴き声が聞こえてくるようになったときは、実際やりきれない思いだった。186

◆景物。

53 【茶】 十三114, 57 【同】 十三114

54 【甜漿粥】 十三114

55 【马蹄烧餅】 十三114

56 【小焦油炸鬼】 十三114

58 【粥】 十三114

59 【烧餅】 十三114

60 【油鬼】 十三114

- ・「様子、まだ出ていくなよ。お湯をもってきてやるからな。熱い茶でも飲もうよ。とにかく昨夜は、お前はえらいめに遭ったものな」187
- ・ちょっとした程さんは帰ってきた。両手に一つずつ大碗一杯の“甜漿粥”と“小焦油炸鬼”や“馬蹄烧餅”の類を、まあどれだけ持って帰ってきたことか。188
- ・「茶はまだだ。まあ粥でもすすろうや。食いなよ。足らなきゃまた買いに行くんだ。金なんかなくなたっていい、借りときゃいい。辛い商売だもの、口だけは可愛がってやらにゃね。さ」188
- ・もうすっかり明るくなった。部屋の中もひんやりとして、明るくなってきた。ふたりは碗を抱え込んで粥をすすりだした。その音は大きくもあり、また甜美なものであった。どちらも声を出さずに、一気に“烧餅”と“油炸鬼”を食べ尽くしてしまった。188

◆祥子は洋車を買うためにこつこつ貯めた「血汗銭」を孫刑事に全て脅し取られてしまう。「車夫は、まずいまずい物を食い、流すのは血だ。最大の力を出して、最低の報酬を得るのだ。彼らは人類のいちばん低い所に立って、すべての人の、すべての法律の、すべての困難の打撃を一手に引き受けなければならないのだ」と作者に言わしめた、希望の芽を無残に摘み取られた様子であった。警察から目をつけられた雇い主の曹先生に言われたとおり、祥子は王家のお抱え車夫「程さん」のところに身を寄せ、一夜明けた場面。程さんは、落胆この上ない祥子にせめてまともな朝食でも取らせて、元気を出させようとこれらの食べ物を用意する。「甜漿粥」は、砂糖を入れた甘い薄粥。「小焦油炸鬼」は小麦粉に塩、ソーダを加え水で練ったものをドーナツ形にし油で揚げたもの。「馬蹄烧餅」は、形が馬蹄銀に似た「烧餅」だが、練り胡麻油(芝麻醬)ではなく香油(胡麻油)を加える。

61 【凍鶏】 十三116

- ・ひのえ午嬢はやっと起きたところで髪はぼさぼさ、目の周りはまだ多少ふくれ上がっており、真っ黒な顔には白い鳥肌がたって、まるで凍らした鶏の毛をむしったばかりといった格好だった。192

◆直喩。

62 【茶】 十三116, 63 【同】 十三116

- ・劉四爺はちょうど部屋の中でお茶を飲んでいた。前には大きな“白炉子”（素焼きの移動できるかまど）が置いてある。五寸ほどもある炎が上がっていた。192
- ・劉四爺は茶を注いで、「さ、まあ一服してから行きなよ」と言った。祥子は茶碗を持って“火炉”の前に突っ立って、ごくりごくり茶を飲んだ。実に熱い茶だったが、彼は眠気を覚えた。193

◆行為，道具。

64 【火鍋】 十三117

- ・「どいつもこいつも頼りにできない。がちゃがちゃ馬鹿騒ぎされるのはいやだ。お前、ひとつうまくやってくれ。やるべきことは、わしに相談せんでもどンドンやってくれ。まず雪を掃くんだ。昼には“火鍋”をおごるよ」193

◆象徴。鶏などで取った出し汁に、肉、野菜、豆腐、春雨などを入れて煮る冬の家庭鍋料理。劉四爺は祥子に対し、自分の誕生祝いへの協力の見返りの度合いとして、身内扱いのごちそうの温かい鍋を提示した。

65 【一堂苹果】 十三119

66 【寿桃】 十三119

67 【寿面】 十三119

68 【苹果】 十三119

69 【寿桃寿面】 十三119, 73 【同】 十四128

・劉老人はすぐさま祥子に林檎一組を買ってこさせた。このとき、ひのえ午嬢はこっそりと彼に二円渡して、一緒に“寿桃”と“寿麵”を買ってくるように言いつけた。“寿桃”の上には八仙人をつけるように、そしてこれを祥子からの贈り物という具合に仕向けたのだった。林檎を買ってきてすぐに皿にならべている間に、寿桃と寿麵も届けられた。これは林檎の皿の後ろに並べた。大きな“寿桃”はその上に八仙人を突き刺し、実にりっぱなものだった。196

・会計方の馮先生はこのときすでに帳簿を締め切って二十五本の紅布と三重ねの寿桃、寿麵、一樽の酒、燭二対と現金二十数円を持って入ってきた。210

◆道具だて。「寿桃」は小麦粉で作った桃の形をした饅頭、「寿麵」は細く長い麵で、いずれも誕生日に供する長寿を祝う縁起物。「一堂」は一皿に四個のりんごをのせたものが五皿。

70 【六大碗，俩七寸，四个便碟，一个锅子】 十三120

71 【三个海碗，六个冷荤，六个炒菜，四大碗，一个锅子】 十三120

・明後日は当日だ、誰も車を持ち出しちゃならん。朝八時半にまずお前達にご馳走してやる。大碗が六つ、七寸皿が二つ、小皿が四つ、鍋物が一つと、ね、これでわしの気もすむんだ。みんな上着を着て来るんだぞ、変な格好で来たやつはつまみ出してしまふぞ。……親友達には特大の碗が三つ、冷菜が六つ、炒菜が六つ、大碗が四つと鍋物が一つ、とこういうご馳走なんだ。199

◆大ごちそうの喩え。劉四爺が貧しい出入りの車夫達へ、自分の誕生祝いの振舞い料理を自慢げに説明する場面だが、老舎はその「ごちそう」の料理名を明示せず、器とその数でその豪華さを代用している。これは車夫達がほとんど口にしたことのない料理名を挙げても、彼等には全く現実感がない。内容よりも宴卓に並ぶその皿数の多さから、大変なごちそうであることを理解させているのである。

72 【茶】 十四126

- ・もう以前彼が望んでいた祥子とはまるで別人だった。誰とだってすぐ友達になり、至る所でうまく立ち回り遠慮なぞせずに人様のお茶や煙草を頂戴し、借りた金は返さず、……207

◆象徴。

74 【炒菜面】 十四128

- ・この報告を聞いているうちに、爺さんまたしてもむかつ腹が立ってきた。前からこんなことだと分かっていたのなら、大盤振舞なんかやめて、“炒菜麵”^{やきそば}だけで追っ払うのだったのに。210

◆換喩，安上がりの軽食で有り合せの野菜と麵を炒めたもの。

75 【猪肝】 十四129

- ・彼女の顔は赤くなってきた。どす黒い赤さの上に白粉の名残があり、これに青いガスの光がさして、まるで煮込み過ぎた豚の肝といった色合いで、実に複雑怪奇で見苦しかった。213

◆直喩。

76 【榴的馒头】 十五137

77 【熬白菜加肉丸子】 十五137

78 【虎皮冻】 十五137

79 【酱萝卜】 十五137

80 【馒头】 十五137

- ・ひのえ午は昼飯の支度を終わっていた。蒸し返しの饅頭^{マントウ}、肉団子を入れた白菜の汁、“虎皮凍”^{フウビイドン}（豚の皮の煮こごり）と、それに“醬蘿巴”^{ジャンルオバ}（大根の味噌漬け）だった。全部できあがってはいたが、白菜のお汁はまだ火にかけてあって、何とも言えぬ甘そうな香を発していた。226

◆ひのえ午嬢の姦計に落ちた祥子が、新婚初日に妊娠が嘘であることを知り、家を飛び出すが、行く当てもなく家に戻ると、昼食が主人の帰りを

待つように、テーブルに並んでいた。この食事の支度に祥子は自分が騙されたことへの恨みを引っ込め「部屋じゅうに漂う香りと暖かみ」に戸惑いながらも自分の「家庭」を意識する。長い单身生活と外食の「点心」（軽食）で済ませてきた祥子にとって、自分の望んだ家庭ではないにしろ、田舎から北京に出てきて以来久々に家庭のぬくもりを感じた食卓であったはずだ。世間から笑われないような人並みの家庭を持つことは、祥子の処世観と合致していることでもある。

・彼は饅頭をかじりだした。お菜は確かにふだんのものより口にあったし、作りたてで温かくもあった。しかし、食べてみてどうも本当にうまいとまでは思えなかった。口の中でもぐもぐやっているうちに、平生まずいものを牛か馬のようにがつつ食べていたときのほうが気持ちがよかったなと思い出したのだ。今日は食事をしても汗さえ出てこなかった。228

◆しかしながら視覚や嗅覚からくる味覚とは全く別に、うまい物をうまいと感じられない、今まで食べてきたまずいもののほうが美味しく思える。食べ物の味覚を以って祥子の心理を表現する。

81 【粮米】 十六142

・人間なんでもともと何ということはない。ただ一羽の鳥みたいなもんだ。鳥でも自分で餌をあさっているうち、時に網に引っかかることがある。そうなれば人のくれる餌をついばみ、実におとなしく籠の中にとまって人のためにさえするのだ。しかもいつ売り飛ばされるか分かったものじゃない。232

・一个人仿佛根本什么也不是，只是一只鸟，自己去打食，便会落到网里。吃人家的粮米。便得老老实实的在笼里，给人家啼唱，而随时可以被人卖掉！

◆象徴。

82 【元宵】 十六142

83 【饺子】 十六142

- ・元宵節までぶらぶらしていたが、祥子はもうとても我慢がしきれなくなった。ひのえ午は上機嫌だった。いそいそと“元宵餅”^{げんしょうだんご}をゆで、“餃子”を作り、昼間は縁日に遊びに行き、晩は燈籠見物に浮かれ歩いた。祥子には一言も文句を言うことを許さなかったが、食べ物だけはたっぷりと手を変え品を変え新奇な物を作ってやったり、買って食わせたりした。234

◆農曆正月十五日は「元宵節」で糯米の粉で作った餡入り団子をゆで汁とともに食す。「湯圓」,「湯団」ともいう季節的食品。「餃子」は茹でたもので、北方の代表的な軽食。

84 【粥】 十六142, 85 【同】 十六142

- ・子供でさえ皆小さな籠を提げて、朝は早々と炊き出しの粥をもらいに列に加わり、午後は石炭がら拾いに出かけていった。234
- ・いちばん気の毒なのは年寄りと婦人だ。年寄りは着るに着物なく、食うに食なく、凍てついた“炕”の上に横になって若い者が儲けてくるわずかばかりの金を心細くもあてにして一杯のお粥にでもありつけることを待ち望んでいたのだ。234

◆象徴。

86 【窩窩頭】 十六142

87 【白薯粥】 十六142

88 【粥】 十六142, 89 【同】 十六143

- ・妊婦だって同じことで、多めにみてもらえるような身分じゃない。食べ物ときたら「窩窩頭」^{ウオウオトウ}か“白薯粥”^{バイシュウヂョウ}(さつまいもの入った粥)に決まっている。いやいやふだんどおり仕事をしなければならぬどころか炊き出しももらいに行かねばならず、賃仕事まで捜さねばならないのだ。……着物とはまるで名ばかりのぼろをまとめて、腹には半碗かたかだか一碗のお粥がだぶついているだけで、あるいは時に六、七か月の子供が入っているくらいのものだ。235

◆象徴。

- 90 【刮骨肉】 十六143
 91 【冻白菜】 十六143
 92 【生豆汁】 十六143
 93 【驴马肉】 十六143
 94 【羊头肉】 十六143
 95 【熏鱼】 十六143
 96 【硬面饽饽】 十六143
 97 【卤煮炸豆腐】 十六143

・ちょうどこういう“雑院”の中で、ひのえ午だけは実に意気揚々たるものがあった。……こんなどん底世帯まで出かけてきて取り引きする商人は、世の中でも一番安い物ばかりそろえて持って来る。“刮骨肉”“凍白菜”“生豆汁”“驢馬肉”，まずはこんな物ばかりだった。ひのえ午が来て以来，“羊頭肉”“燻魚”“硬麵饽饽”（夜泣き饅頭）さては“鹵煮炸豆腐”，こんな小商人が彼女の部屋の外に立ち止まって、一声二声叫んでみるようになった。236

◆下層庶民の暮しぶりのうち、最下層と祥子夫妻を物売りの食品で対比して言う。どんな階層の人物がどういった物を買って食べるか、単純明解であり、長々とした叙述がない。「刮骨肉」は肉をすっかりさばいてしまった後、骨に残った肉をこそぎ落したもの、「凍白菜」は冬季土中で保存する白菜の凍り付いてしまった部分、「生豆汁」は豆乳の沈殿に近い部分で酸味がきつい、「驢馬肉」は羊豚鶏牛よりずっと廉価な驢馬、駱駝、騾馬の肉で苦役が終わってつぶされたもの。ひのえ午嬢が雑院に越して来てからは、「羊頭肉」（羊の頭部を茹でたもの、内臓の塩茹でも売る）、「燻魚」（魚の燻製のこと。しかし実際は安価な豚や牛の内臓の燻製も扱っていた）、「硬麵饽饽」（小麦粉または雑穀で作った麵製品）、「鹵煮炸豆腐」（やや厚めの油揚げを煮て塩などで味付けしたもの）など普通の品物を商う物売りが雑院（もとは一軒の中庭付き邸宅に何世帯もが雑居している）にもやってくるようになった。

98 【牛奶】 十六143

- ・何とも辛抱できないのは、彼女が自分に車を引きに行かせないで、毎日上等の食物をどんどん食わせてくれるが、これは考えてみれば牛にいい餌を食わせて牛乳をたくさん搾るようなものだ。236

◆直喩。

99 【餅子】 十六146

- ・「よし、もうひとつ走りしよう。本当はこんなもらい方ってねえんだが、まあいいや。少しでもたくさん“餅”を提げて帰るようにな。哥さん達、ごめんよ」240

◆象徴。

101 【茶】 十六146

102 【肉餅】 十六146

103 【紅豆小米粥】 十六146

- ・五時ごろになってやっと車を返し、茶店でしばらく時間をつぶし、茶を二瓶飲んだ。そのうち腹が減ってきたので、今日は外で食事をしてから帰ってやろうと考えた。そこで“肉餅”（肉饅頭）を十二両，“紅豆小米粥”（小豆入りの粟粥）を一碗とって、げっぷを連発しながら家路についた。241

◆与えられた物を食べ、何もすることもなく過ごした正月が終わらぬうちに、車を引かぬ生活に我慢がなくなってきた祥子は、ひのえ午に無断で車を借り商売をした。仕事が終わり夕食の段になると、家庭の料理ではなく、かつての車夫の夕食に心を奪われた。車夫の夕食—他人に束縛されない自らが切り開く生活への回帰願望を夕食で表現している。

104 【瓜子儿】 十六150, 112 【同】 十七160

- ・家に着いたとき、ひのえ午はちょうど部屋の中で退屈しのぎに西瓜の種をかじっていた。「またこんなに遅く！」彼女の顔には喜びの色はまるでなかった。

た。248

- ・この二人も数日ならずしてまったく親密な間柄になってしまった。ひのえ午は間食が好きだったが、西瓜の種とか何とかちょっとした物を食うにつけても、いつも大声で福子を呼び談笑しながら一緒に食べるのだった。264

◆行為。「瓜子兎」は西瓜，向日葵，南瓜の種に味付けしたもので，お茶受けなどに供するが，「ひまつぶし」に食べることが多い。

105 【瓜果梨桃】 十七155

106 【花生烟卷】 十七155

- ・二強子は四十五，六だったので，もう車引きはやめようと思った。そこで天秤棒と籠を買い求め，雑貨や果物や落花生や煙草を買ってきた。品物をすっかりそろえて二か月ほど商売をやってみたが，すっかり裸になってしまった。損も損，大損した。256

◆対句。「瓜子兎」，「果物（乾燥果物も含む）」，「落花生」，「煙草」などごちゃごちゃとした物の小商いを言う。

107 【茶叶】 十七156

- ・新しく車を買ったのだから，着るものだってきちんとしなければならない。自分は高等車夫なのだ。飲む茶だって上等品でなければならん。お客だって貧乏人なんか乗せやしない。257

◆象徴，行為。

108 【烧饼】 十七159

109 【麦茬白薯】 十七159

110 【落花生】 十七159

111 【铁蚕豆】 十七159

- ・（子供だって仕方はない）ごみ集めの車のあとをついて行って，その中から金物のかけらやくず紙を拾い分けることも知っていた。こうすれば運がよけ

れば焼餅の四つ五つぐらいは買えることもあり、筋だらけの薩摩薯一斤しか買えないときもあった。こんなときには、皮だろうが筋だろうがすっかり飲み込んでしまうのだった。時には二人で二銭銅貨一つしかもらえないこともあったが、こんなときには落花生か鉄蚕豆を買った。これくらいで飢えがしのげるわけではないが、少しでも長く口が動かして楽しみだったからだ。263

◆景物，比喩。下級品の薩摩芋，麦を刈り取った後の畑に植える芋は，地味が悪いので，小さく筋が多い。「鉄蚕豆」は干した蚕豆を焙った物で堅豆。

113 【肉】 十七161

- ・「何か食べさせてよ，お腹がぺこぺこで動けないんだよ」と言われてみれば，彼女と言えども前後の考えもなくなってしまうのだ。姉さんの肉を切っても食べさせるよりほかはないのだ。

◆隠喩。原文ではこの文の前に「为弟弟们吃饱，她得卖了自己的肉（弟達にひもじい想いをさせまいと，自分の身を売るしかなかった）」がある。

114 【雑合面】 十八163

115 【粥】 十八163

- ・女の方は，目に涙をためて方々に金を借りに歩くのだ。……それでもやっとこさと二十文のぼろぼろの紙幣一枚でも借りられれば，しっかりこのお宝を握ってもろこしの粉でも買って来て一鍋の粥を作ってみんなに食べさせるのだった。268

◆最低の食品。

116 【茶】 十八165

117 【熱茶】 十八165

118 【茶】 十八165

- ・ある者は車を木陰に置いて幌をかぶせ、自分はその中に座って居眠りをしていた。ある者は小茶館に入って茶を飲み、ある者はもう初手から仕事はあきらめ、……272
- ・もういったいどれぐらい水を飲んだことか、それでも茶館に飛び込んで熱い茶を二杯飲んで、やっと胃を納得させた。茶を飲み込むと立ち所に汗が流れてきて、身体はまるで空っぽで一滴の水も貯えることができず、片っ端から出てしまうように思われた。273

◆行為。

119 【姜糖水】 十八169

- ・祥子は一気に家まで飛んで帰り、火にかじりついて身体を温めたが、雨の中の木の葉のようにがたがた震えが止まらなかった。ひのえ午が一碗のしょうが湯に黒砂糖を入れて飲ましてくれた。彼は白痴のような顔をして、震える両手でお碗を抱え、一気に飲み干した。280

◆道具，行為。

120 【核桃】 十八170

- ・彼等は休みなしに何か力仕事をして金を稼いでいるのだから、年中汗をかいている。しかも、北の寒い国から襲ってくる暴風雨は速さも速し、寒さも寒い。時には雨の中に胡桃くらいの雹を混ぜていることさえあるのだ。281

◆直喩。

121 【老玉米】 十八170

122 【高粱】 十八170

- ・一度雨が降れば畑のもろこしや高粱はぐんと背が伸びるが、そのかわり城内の貧乏人の子供は何人か殺されるのだ。281

◆隠喩，対比。

123 【茶水】 十八170

- ・胸の中で勘定してみた。自分で引けば毎日いずれにしろ五、六十銭の稼ぎにはなる。まあ、当分着物は新調しないとしても、家賃、薪炭、灯油、茶などだけで、やっと二人の暮らしにぎりぎりいっばいだ。284

◆話題。

124 【作菜作飯】 十九176

125 【剩汤腊水】 十九176

126 【饭菜】 十九176

127 【零食】 十九176

- ・自分のお腹を見て、彼女は“炕”から下りるのさえ大儀がった。お菜、御飯の煮炊きはすべて福子に頼んだ。もちろんお余りはみんな福子に持って帰らして弟達に食わしたのだった。御飯やお菜のほか、やはり間食もとらなければならぬ。お腹が大きくなればなるほどうまいものをたくさん食べなければならぬ、口に不自由をさせてはならぬと考えた。時を構わずいろんなものを買って食べるほか、祥子には毎日何かうまい物を持って帰るよう頼んだ。

291

◆話題。

128 【热芝麻酱烧饼】 十九179

129 【酱肘子】 十九179

- ・陳二奶奶は親切にも神符の効果を見届けてから帰ろうと言いだしたので、祥子も彼女らに食事を出さねばならぬ羽目になった。祥子はこの仕事を福子に頼んだ。福子は熱い“芝麻醬燒餅”（ゴマみそつきの焼餅）と“醬肘子”（豚の腿肉の煮付け）を買ってきた。しかし、陳二奶奶はこれでもまだお酒のないことに不満をもらした。297

◆象徴。祥子が考え及んだ上等の食品。

130 【蒜】 二十183

・「お前、祥子の所へ何しに来とるんだ」二強子は目を見張って、両足は東にひよろり西にひよろりだった。304

・……，两脚拌着蒜，……

◆直喩，北京，天津方言。「拌蒜」は歩くのに足がもつれる様を言う。共通語では「拌蒜加葱」を作り，大袈裟に言う，元々無い内容を付け加えるの意。

131 【酒菜】 二十183

・みんなが酒を飲むときには彼も一緒に飲んだ。しかし，度を越すようなことはなかった。こんな時はいつも酒や肴を買ってみんなに振る舞った。310

◆原文は「酒菜」で酒肴の意。

132 【枣儿】 二十188

・まず家の造りから話してみると，全体で六間で，ご主人が三間使い，台所が一間，残りの二部屋が下部屋になっていた。庭は猫の額ほどしかなく，南側の土塀に寄りかかって程よい加減の大きさの棗の樹が一株生えていた。枝にはいくつかのもう半分色づいた実がなっていた。312

◆景物。

133 【活魚】 二十190

・まるで街から買ってきた生きた魚が，帰ってきて水の中に放してやると当分は実に生き生きしているが，そのうちにまたおとなしくなってしまうのとよく似ていた。315

◆直喩。

134 【栗子】 二十一194

・月曜日の昼飯後，夏太太はこの女中候補者に暇を出した。どうもやることが

うそうそして汚らわしいと言うのだった。そして、祥子に栗を一斤買いに走らせた。

焼き立ての熱いやつを買って帰り、祥子は戸の外から声をかけた。321

◆風物。晩秋から冬の季節食品。

135 【(刷锅水似的) 茶】 二十二202

136 【煎包儿】 二十二202

137 【白菜帮子】 二十二202

・茶館などへは入る気にはなれず、車を城門の車の溜まり場において大きな素焼きの茶壺と大茶碗をもって茶を売り歩いている子供を呼び止め、お茶を二杯飲んだ。まるで鍋の底を洗ったようなお茶を。まずさもここまですれば大したものだ。しかし彼は自分に言い聞かせた。今後はいつもこいつに決めた。うまいお茶や上等の飯に金を費やすことはやめるんだと。こう決まるとついでに何か一容易に咽を通らない一食べ物をとって困難欠乏に耐えるこれからの新生活の門出にしようと考えた。そして煎包兒を十買った。中身は全部白菜のくきで、外側はかたくてじゃりじゃりしている。どんなに食べにくくても平気だ。彼は全部飲み込んでしまった。334

◆自分の車を得んがため支出の節約への戒めに、最低の茶、最低の点心を自らに与えた。「煎包兒」は小麦粉で作った皮に、様々な餡を包み、蒸してから油で揚げたもの。ここでは「外側はかたくてじゃりじゃり」で、雑穀を混ぜた粗悪な小麦粉と見える。

138 【柿子】 二十二207

・嬉しいことがあると天気まで美しくなる。まるで今までこんな美しい冬の晴天を見たことがなかったような気がした。本当に自分が喜んでいるということを行いに現わすため、彼は凍らした熟柿をかって一口に頬張った。口中ぴりぴりと冷たく、歯の根に染みて寒かった。冷たさは口からだんだん胃に降りていって、全身にふるふるっと震えがきた。二口三口で食べ終わって舌は

まだしびれていたが、気持ちは実によかった。343

◆「凍柿子」は「冷やっとする」の意味があるが、ここでは再会した曹先生に胸のうちを洗いざらい打ち明け、再出発を期した祥子のすっきりとした気分を「凍った熟柿」になぞらえた。

139【焼餅】二十三211, 141【同】二十三211

140【油鬼】二十三211

142【果子】二十三211

・祥子は夢遊病者のような格好でぶらりぶらり街を歩いているうちに小馬兎のお爺さんに出会った。この爺さん、とっくに車夫はやめていた。着物も以前よりもっとひどくぺらぺらで、柳の天秤棒を担ぎ、前には大きな素焼きの茶壺をぶら下げ、後ろには瓢箪なりの籠を下げ、籠の中には“焼餅”と“油炸鬼”のほかにも大きな煉瓦を一つ入れてつり合を取っていた。彼はまだ祥子を覚えていた。348

・爺さんはあのぼろ車を売り飛ばし、毎日茶壺と少しばかりの“焼餅”や菓子を持って、車の溜まり場で商いをしていたことを知ったのだ。348

◆景物。

143【茶】二十三211, 144【同】二十三212, 146【同】二十三213

145【熱的(茶)】二十三212

・祥子は彼の茶を一杯飲んで、自分の心の中の憂さを二言三言おおざっぱに言って聞かせた。348

・「……目先の利くこのわしが、孫の一人さえ守り切れなかったんだ。やつ、病気になってみすみすわしの手の内で死ぬことを知りながらも、いい薬を買ってきて飲ませる金さえなかったんだ。もうやめとこう、何も言わんでいい。えーい、お茶、お茶、熱いお茶はいかが」349

……「熱いお茶はいかが」

爺さんはまず売り声を一声かけて、それから祥子の身になって考えてくれた。

「……おれたち汗を金に、女どもは肉を金に買えとるんだ。わしにはよく分かるとるよ。お前だってまずあそこから洗ってみな。だが、きっとそこにいるなんて思いたくないがな。ただ……。えーい、お茶、熱いお茶はいかが」

350

◆景物。

147 【白薯（挑子）】 二十三215

・ただただ、腹の空いたのを補うために苦しみ、腹一杯になれば眠るだけだ。これ以上何を考える必要があるか。ぎすぎすに痩せた犬が焼き芋屋の側で皮や筋を待っているのを見て、自分もこの畜生と同じで、一日の労働もこの皮や筋を捨うだけのことだと悟った。どうにかこうにか生きていくだけがすべてだ。355

◆景物。

148 【烙餅卷醬肉】 二十三216

・顔も洗わず、歯も磨かない。こんなこと元来どうでもいいことだ。金もかからず手も省ける。体裁体裁といっても誰に見てもらうつもりなんだ。ぼろを着ても、腹には肉詰めの“烙餅”でも入れときゃ、これが本当の内容充実なんだ。腹の中にうまいものを入れときゃ、死んだって多少の水と脂が残り、餓死した鼠みたようなぶざまでなくてすむのだ。357

◆直喩。肉を巻いた「烙餅」, 上等の軽食。

149 【茶】 二十三217

・彼には意見もなく希望もないのだから、言葉はもういらぬのだ。値段の取り決め以外彼は朝から晩まで口は閉めたきりで、飯を食い茶を飲み、煙草を吸うだけの道具になったのだ。358

◆行為, 諷喩。

150 【豆汁】 二十三217

151 【咸菜】 二十三217

・今では、うまいことがあれば何でもやる。人の煙草すら一本でもよけい吸おうとするし、物を買うにも平気で贖金を使い、豆汁を飲むにしてもそばの漬物は人一倍よけい食べ、車を引くにしても金は一銭でも多くとる代わり力のほうは少しでも出ししぶろうとする。358

◆行為，道具。

152 【青杏】 二十四220

153 【櫻桃】 二十四220

154 【玫瑰枣儿】 二十四220

155 【玻璃粉】 二十四220

156 【扒糕】 二十四220

157 【涼粉】 二十四220

・また妙峯山にお香を供える時節になって、気候は急に暑くなってきた。……路傍には青い杏が出回って、もう一山いくらで売られており、櫻桃は目にもまぶしいほど赤く、小さな棗の煮込みを盛った盆の上には、甘さを慕って蜜蜂が群れていた。^{ポオリイフエン}“玻璃粉”は大きな磁製のお碗の中で乳白色の光を発し、^{バア}“扒糕”と^{ガオ}“涼粉”^{リヤンフエン}を売る天秤の荷の中は実に小ざっぱりして、いろいろな色の薬味を並べていた。362

◆初夏の北京の風物を並べた景物。「玻璃粉」は寒天に似た物で糖蜜をかけて食す屋台の食べ物。「扒糕」は蕎麦粉で作った蕎麦がきのようなもので、酢醤油や芥末、大蒜、辣油などをかけて食べる。「涼粉」は片栗粉、緑豆粉を煮固め、冷やして細切りにし、「扒糕」と同じような薬味をかけて食べる。

158 【清茶】 二十四220

・中央公園の牡丹や芍薬は、雅を好む紳士や、雑踏を愛する有象無象をひきつ

け、人々は心閑に歩を移し、立派な扇子を打ち振り、歩き疲れば赤い土塀の前の松の下で憩い、十分にのんびりした気分を味わわせてくれる緑茶を飲みながら、目では行きずりの大家の閨秀や南北の名花をちらりちらりと盗み見て、静かに楽しんでいたのだった。363

◆景物。

159 【豆汁】 二十四220

160 【咸菜】 二十四220

161 【辣椒】 二十四220

162 【鸡子儿】 二十四220

163 【炸蛋角】 二十四220

・豆汁屋の屋台の上の漬物は実に目のさめるような大きな花のように開き、その一盛りの上には海老茶色の辣椒がかけてあった。また、このころは卵が一番安い時節で、“炸蛋角”（卵の三角型あげ）はこがね色に柔らかく見ただけでも知らずに唾をぐっと飲み込むのだった。364

◆景物。

164 【猪头肉】 二十四221

165 【卤煮豆腐】 二十四221

166 【盐水豆儿】 二十四221

・釣りがすんだら野外の茶館へ入って、“猪頭肉”（豚の頭の肉の煮付け）や“滷煮豆腐”（湯豆腐）をつつき、“塩水豆兒”（枝豆）を肴に“白乾兒”でも飲めば腹は膨れ、心は天国に遊ぶのだ。364

◆景物。偶然再会した曹先生にこれまでの出来事を打ち明け、曹家のお抱え車夫として、小福子と世帯を持って出直そうと決意した祥子だが、小福子の自殺を知り、生きていく力を失う。「祥子は依然として文化を誇る北京城内にいたのだが、もう完全な野獣になってしまっていた。それも自分の過ちというものは何一つなくてだ」。項目152から166は、生きる屍の

如く街をさまよう様子との対比で、祥子の境遇とは全く無関係であるかのように、北京は爽やかで楽しい季節を迎えたという風物を並べる。

167 【冰激凌】 二十四222

・銃殺などは簡単過ぎて少しあっけない。みんなが聞きたがるのは“^{リンチ}凌遲”（手足を切り落としてから死に至らせる処刑法）だとか“^{カントオ}砍頭”（首をはねる）だとか“^{バオビイ}剥皮”（皮をはぐ）だとか“^{ホオマイ}活埋”（生き埋めにする）の話で、聞いただけでもアイスクリームでも飲んだくらいちょっとばかり寒気を催すのだ。

366

◆直喩。

168 【酱肉】 二十四224

・万に一つ、もし彼が突然向き直って、「二十年経ってみろ、おれはまた男一匹に生まれ変わるとるんだぞ」と言わぬとも限らんじゃないか。またもしも彼が“白乾兒”二壺と“^{ジャンロウ}醬肉”（肉の煮付け）一皿もってこいなどと言い出したらどうする。誰も帰ろうなどとは思わない。369

◆刑場に向う死刑囚が野次馬にその気概を示す道具だて。

169 【涮羊肉】 二十四227

170 【硬面饽饽】 二十四227

171 【芝麻酱烧饼】 二十四227

172 【香片茶】 二十四227

173 【花糕】 二十四227

174 【元宵】 二十四227

・北京は旧都という名称を奉られてから、その外観、手芸、食物、言語、巡查等々が、すでにだんだんと外へ流れ出していた。……西洋化した青島にだって北京の涮羊肉（原訳一烤羊肉）があり、雑踏した天津にだって夜中になればあの哀調を帯びた「^{インミエン}硬麵—^{ボオボオ}饽饽」（麵をかたくこねて焼いたかたいやきも

の) という声が聞かれるのだ。上海、漢口、南京、どこにも歯切れのよい北京語を話す巡査と役人がいて“芝麻醬燒餅”を食っている。“香片茶”は南方から北京に送られてきて、北京で今一度蒸されて再び南方に移出されている。……ところが、本家の北京はというと、しだいしだいに昔の威厳を失墜し、お菓子屋だって、九月九日を過ぎてさえ花糕を並べて売ったり、正月に出す元宵餅が秋にはもう市に出たり、……375

◆象徴。「香片茶」は北京を代表する茶種で、ジャスミンの花弁と一緒に焙って香りをつけたもの。「花糕」は表面になつめや栗の実をあしらった糯米で作った蒸し菓子で、重陽節の食品。

老舎は「我怎样写『赵子曰』」⁷⁾で「貧乏人の空想は、およそ肉餡の饅頭から離れられない。わたしがそうである」と諧謔を込めて述べたように、老舎文学世界の「食」には、決して山海の珍味や華やかな晩餐はない。あったとしてもそれは庶民の視点からのもので、『駱駝祥子』では、例えば、劉四爺が出入りの車夫達に自分の誕生日の祝いの宴で振舞う食事を「大碗が六つ、七寸皿が二つ、小皿が四つ、鍋物が一つ」とその料理の名ではなく、皿数の多寡で示している。項目71, 72でも述べたが、これは将に「ご馳走」が如何に庶民とは縁遠いものかを諷諭的に表現したものと言える。

魯迅の『阿Q正伝』には、居酒屋の場面が多いが、「飲食」が物語り展開のカギとなるようなことはまず無い。また食品も「鯛のから揚げ」,⁸⁾「マントウ」, 農作物としての「筍」,⁸⁾「油菜」,⁸⁾「芥子菜」,⁸⁾「白菜」,⁸⁾「大根」⁸⁾を数える程度である。

7) 老舎「我怎样写『赵子曰』」, 『老舎论创作』増訂本 上海文藝出版社 1982年8月, 第10頁

8) 尾上兼英・丸山昇編『中国の革命と文学1 魯迅集』『阿Q正伝』 平凡社1971年12月。

「鯛のから揚げ」の原文は「油煎大頭魚」で、これは少量の油で炒めて味付けする調理法である。また「大頭魚」は共通語では鱈、鯛を言うが、当時から近年まで、紹興で海洋魚を食すという習慣は考えにくく、方言の可能性はある。杭州で言う「包頭魚」, 頭が丸いやや大振りの淡水魚ではないかと想像する。「マントウ」は原文「饅頭」で、北方の「マントウ」ではなく、南方方言では「包子 (肉饅頭)」を言う。

本邦現代作家で「食」を巧みに駆使するのは、池波正太郎をあげねばならない。

池波正太郎は、生きていくために食物を取るのであるから、食物に関心を持たねばならないというが、自他ともに認める食通であり、その時代小説はさながら、「江戸食物図鑑&グルメガイド」の態をなす。

下谷の車坂町代地に〔小玉屋〕という小さな蕎麦屋がある。

いかにも頑固そうな五十がらみの亭主と女房と、一人息子と三人だけでやっているのだが、蕎麦は太打ちのくろいやつで、薬味も置いてなく、流行の貝柱のかき揚げを浮かせた天麩羅蕎麦などはもちろんのこと、種物は、いっさい出さぬ。⁹⁾

池波小説では、「食」は景物もあるが、引用のようにそれ自体が話題となっていることが多く、老舎作品との類似性も認められるが、池波小説では、「食べて生きることへの悦び」が表現されるのに対し、老舎の物語世界では、「食べて生きることへの苦しみ」が綴られるのである。これは単に時代性の相違から来るだけのものではなく、「食」に対する芸術表現と観念の異同と解すべきであろう。「食」は老舎の小説世界の文脈において極めて重要な部分を占めているのである。

9) 池波正太郎『鬼平犯科帳11』文春文庫 1982年5月, 51頁